

『情操を養うこと』

情操とは感情の一種といわれています。感情には様々なものがありますが、その中で情緒という感情は、喜びや悲しみや怒りを表した一時的な感情であるのに対して、情操の感情というのは、一時的に湧き上がってその後冷めきってしまうというのではなく、ずっとその人の心の中にあって変わらない感情です。美しいものを見て「ああ美しいな・・・」という心のあり方をいいます。情操は一般には「価値あるものに接したときに心から湧き上がってくる感情」であるといわれています。

また、道徳の時間で「善」とは何かということを勉強するときに起こる感情として、こうすることは悪いことである、こうすることが善いことだと判断し、そのように努めようとする態度でもあります。

人は美しいものやより高いものにあこがれ、美術品、建築物、音楽など、すぐれた芸術に出会うと感動します。そして、自らも美術や音楽などの芸術を通して、自分の心を表現しようとするものです。このように人は、真理や善や信仰や美を求める感情や態度によって、より人間的に生きるための温かい心をもつことができ、情操豊かな人になるのです。

図工・美術、音楽の教科には、情操を養うという目標が掲げられています。学校の授業において、よい作品や楽曲などに触れる場面が設定されています。国語においては、目標の中に情操という言葉が使われていませんが、文学的な作品に出会うことで、子どもたちに情操を養うことができるでしょう。算数については、それまで理解できなかった解き方がわかり、答えを導き出すことができたとき、子どもたちはうれしい気持ちになり、そのことが知的情操を養うきっかけとなるかもしれません。

子どもに情操教育をほどこしたいと考える親たちは、ピアノを習わせたり、絵を習わせたりしていますが、子どもたちがその習い事に感動しながら、興味・関心をもって取り組んでいるかという点、必ずしもそうではないといえます。確かにピアノを弾く、絵をかくということの技術は上達するでしょうが、情操という心を養っているかどうかはわかりません。

あるピアノ教室の先生が話していたことですが、指示された通りの練習はこなしているが、練習が終わると「やっと終わった」とうれしそうな表情を見せる子がいるそうです。

ピアノを習わすことに親はとても熱心なのですが、当の本人は仕方なく習っているという様子がかげえ、そのような子には技術面の指導に力点をおかずに、自主的な練習を促し、その結果上達した点に焦点を当てほめるようにしているそうです。努力したことがほめられるという喜びを少しでも味わわせたいというのです。

大人が子どもの情操を養うためによいことと考え、子どもにあれこれと経験させたとしても、大人の思い通りに子どもが感動をおぼえたりするわけではありません。あくまで子どもたち個々の心の中のあり様が異なることから、一様にはいかないものです。つまり、大人が美しいと感じて、それを子どもに見せて「美しいだろう」と問いかけたとき、必ずしも「美しいね」と子どもが答えるとは限らないのです。「美しいなあ」とか「いいなあ、自分もそうなりたいな」などの感動や感情は強制されてもつことができるものではないのです。したがって、大人たちは、子どもにとってよいことをしてあげたのだから、当然情操豊かになったなどと思ってはいけません。情操を養うということはそういうことではないのです。

しかし、大人の働きかけ全てが無駄なのかというと、そうではありません。子どもたちが感動したり、より価値あるものに近づきたいなどという情操豊かな人間性を備え、よりよく生きようとする態度や能力を身に付けてほしいと誰もが考えるところです。放っておけば子どもたちが自ら感動することをおぼえたり、情操を養っていくというものでもありません。やはり、大人は情操を養うための種をまいていかねばならないのです。短期的な効果は期待せずに、子どもたちに美しいもの、より価値の高いものなど様々な経験をさせることが必要です。このことは、学校教育はもちろんのこと、家庭生活の中で、地域社会の中で、子どもの生活する環境の中で、子どもたちが何かを感じたり、感動したりという場面は数多くあるはずです。

昨今、きれいな子どもが増えていて、小学生の暴力行為が増加傾向にあるといわれています。電子機器やゲームなどに多くの時間を費やしてしまい、体を使って体験したり、「美しいな」「きれいだな」「感動して声もでなかった」などの心を揺さぶられる経験が足りないのも一因なのかなと感じています。改めて子どもにとってよい体験が必要だと思うこの頃です。